

## 補論

政府の産業政策と地方都市アダナにおける繊維

産業の発展

棉花の改良品種の導入と工業化政策 -

## はじめに

19 世紀半ば、アメリカの南北戦争を発端とする「棉花危機」により棉花<sup>100</sup>の国際価格は高騰し、トルコでも商品作物として注目を浴びた<sup>101</sup>。この綿花栽培のブームは、南北戦争の終結によって短期的に収束したが、19 世紀末に棉花価格が高騰すると、再び注目を集めるようになり、エーゲ海及び地中海の沿岸部での栽培が本格化した。こうして棉花がヨーロッパ市場向けの主要な輸出品目となったが、他方で綿製品が輸入品の上位を占めるようになった。そしてこのような貿易構造は、1923 年に共和国が成立した後も同じであった。

政府は、1930 年代に入ると、輸入代替による工業化政策を推進し、国内にある棉花を使用した繊維製品の国産化をおこない、これまでの貿易構造からの脱却を目標に掲げた。当時、新設された近代的工場では、中・長繊維の棉花が原料として使用され、トルコ産の短繊維の在来種は、工業用原料には不向きであった。そのため綿紡績業の工業化には、まず中・長繊維の米棉品種の普及が不可欠であった。事実、1950 年代以降、繊維産業が飛躍的に発展を遂げた背景には、1940 年代後半にこの問題が解決されたことがある。

本章では、第二次世界大戦後のトルコ経済を支えた繊維産業の成長要因として、政府の輸入代替と米棉品種の移植政策の関係を明らかにする。途上国において工業の近代化を目指す政府が、主導的に新技術を選択し、普及を指導することは効果的とされている。だがどのような政策を採用し、技術を選択して、普及させたのかによって、その後の経済発展の方向は大きく異なる。新技術の普及は、設計された計画とそれを受容する側の社会制度が組み合わさることで、はじめて機能するのである。実際、米棉品種の移植は世界各地で試みられたものの、すべてが成功したわけではなかった。ニューオリンズ種の棉花の普及は植民地のインドはある程度の成功を収めたが、明治初期の日本及び 20 世紀初頭の中国では失敗に終わっている<sup>102</sup>。本章で取り上げるトルコは、1940 年代にアカラ種の普及に成功した。改良品種の導入自体は、19 世紀末期から民間資本によって試みられていたが定着には至らなかった。しかし 1940 年代後半の米棉品種の成功が、共和国政府の主導によって実現し、第二次世界大戦後の繊維産業の発展への道が開かれたのである。

しかしこれまでの先行研究では、第二次世界大戦後の繊維産業の発展要因は棉花生産の増加であり、それを可能にしたのは、アメリカのマーシャル援助によるトラクターの導入であると主張されてきた<sup>103</sup>。そのため米棉品種の普及は、これまであまり議論がおこなわれてこなかつ

---

<sup>100</sup> 本章では、「棉」の字を使用する場合、紡績工程前の状態を示す。紡績行程以降は「綿」と表記する。

<sup>101</sup> トルコにおける棉花栽培について、古くは紀元前 330 年に確認される。18 世紀にはイズミル港からイギリスに向けて棉花が輸出されたが、19 世紀始めまでに衰退した。

<sup>102</sup> インドの事例に関しては長尾（2004）、日本に関しては辻（2000）、中国に関しては瀬戸林（2006）を参照されたし。

<sup>103</sup> 1948 年から 1952 年には、アメリカ合衆国からのマーシャル・援助金によってトラクターが導入された。詳しくは、University of Ankara Faculty of Political Science (1953) を参照されたし。トラクターと農業労働者の関係については、Robinson(1977)また

た。確かにトラクターは耕作面積を飛躍的に拡大させ、生産量の増加に貢献する。しかし綿工業の発展に必要とされたのは棉花の生産量よりも品質の問題、中・長繊維の棉花の供給であったことが、共和国初期の各種報告書の中で指摘されている<sup>104</sup>。つまり米棉品種の普及が不可欠であった。

米棉品種の普及過程で問題となったのは、改良品種の定着だけではなかった。新たに導入された米棉品種は、在来種に比べ、摘み取りの期間が短く、また手間も要した。そのため、米棉の急速な普及に伴い、収穫期には短期間に大量の労働需要が生じた。この問題を解決したのが、遠隔地からの安価な季節労働者の供給であった。この時期の季節労働者の需要の増加は、これまでトラクターによる耕作地の拡大と考えられているが、米棉と在来種の植物学的な違いによって、大量の季節労働者が棉花の摘み取りの季節に必要なことも見逃せない。1940年代後半のアダナでは、米棉改良品種の普及に伴い、摘み取りの時期に季節労働者の需要が高まったことを指摘する調査報告が存在する<sup>105</sup>。トルコの季節労働者の問題は、経済格差、労働条件、児童労働といった様々な視点から、現在でも社会問題として国際的に取り上げられている。しかし季節労働者を供給する制度は、これまで十分に検証されてこなかった。また、季節労働者の人数は記録として残されておらず、その推計もされてこなかった。

それゆえ本稿では、米棉移植の成功要因について、共和国初期の輸入代替政策との関係から検証を試みる。また、米棉移植の過程で生じたとされる摘み取りの労働需要の増加を、棉花生産量および当時の報告書をもとに推計する。またこのように、特定の季節に限定して大量の労働者を確保するのは、何らかの制度が機能しない限り不可能であった。アダナ県の場合、民間の季節労働者斡旋制度が果たした役割が重要といえる。地域社会に内在していた自生的な制度を活用することで、短期間に大量の季節労働者を供給することが可能となったのである。その背景として、工業化を最優先する共和国政府の経済政策を指摘することができる。本章では、この点について当時の斡旋業者に対する法的規制の変容から検証をおこなう。

本章の分析では、主に1930年から1940年代末までのアダナ県の事例に焦点を当てる。アダナ県は、地中海に面する肥沃なチュクロバ平野の中心に位置し、棉花栽培と繊維産業の町として知られている。アダナでは、オスマン帝国末期以降、大規模経営によって綿花栽培がおこなわれ、外国資本及び非イスラム教徒資本によって近代的工場が設立された。現在は繊維産業から多くの企業グループを輩出した地域として知られている。

今回、史料としてアダナ商業取引所のレポート「棉花と穀物」(Adana Ticaret Borsası Pamuk ve Tahıl 1944-1945, 1949-50, 1951-1952)を参考とした。アダナ商業取引所はこの地域の棉花取引とその促進に中心的な役割を果たした機関であり、独自の専門家による調査も行っていた。この報告書は、アダナ全体の棉花生産量を取り扱ってはいないが、1925年以降の取扱量、棉花栽培の面積、品種別価格などが在来種と改良品種ごとに記載されている。国

---

は Şeker(1986)を参照。

<sup>104</sup> Kılımcıkaya,(1930),または Aydemir (1939)を参照。

<sup>105</sup> 1950年代のアダナについては Hinderick and Kiray, (1970)が挙げられる。

家統計局のデータは、これらの報告書をもとに作成された。国家の経済政策との関係に関しては、1930年の産業会議の報告書(1930 Sanayi Kongresi)、農業会議にむけて作成された報告書「トルコにおける棉花」(Türkiye’de Pamuk)、「棉花栽培報告書」(Pamuk İşleri Çalışma Rapor)、商工会議所が作成した「トルコにおける綿産業」(Türkiye’de Pamuk İpliği ve Pamuklu Mensucat Sanayi)を使用する。これらの報告書は当時の棉花栽培の状況及び問題に関するものであり、政府にも提出され、1930年代の国家の経済政策及び「第1次5ヵ年産業政策」の作成に大きな影響を与えたとされる。また季節労働者の供給に対する政府の取り組みは、労働者の斡旋業を規制する一連の労働法の条文を参考とする。

## 1 輸入代替政策と原棉問題

### (1) 共和国以前の棉花栽培の推移

トルコでの棉花栽培は古く、紀元前 330 年にすでに栽培がなされていたことが確認される。商品作物として棉花栽培が、アダナで開始されるのは、1830年代にエジプトのイブラヒム・パシヤ(İbrahim Paşa)の侵入であった<sup>106</sup>。その後棉花は、アメリカの南北戦争を発端とする「棉花危機」によって国際的に注目を集めた。オスマン帝国では国際価格の高騰に目をつけ、1862年に棉花栽培の奨励政策を發布する<sup>107</sup>。1866年には、アダナを中心とするチュクロバ地方に軍隊を投入し、この土地を支配する遊牧民を討伐して、強制的に定住させ、彼らを棉花栽培にあたらせた<sup>108</sup>。「棉花危機」によるブームは短期的に収束したが、19世紀末にはフランス及びドイツ<sup>109</sup>で需要が高まった。またトルコでも栽培が拡大し、棉花は輸出全体の10~15%を占め

<sup>106</sup> アダナでの棉花栽培は、1833年にこの地の農業の潜在性に目をつけたエジプトのイブラヒム・パシヤ(İbrahim Paşa)の侵入による土地開発から始まる。1840年にはエジプト軍は撤退した。この時期キプロスから棉花の種や近代的農法が持ち込まれた。

<sup>107</sup> オスマン朝政府は1862年1月27日に棉花栽培の奨励政策を出した。新規棉花栽培者に対する、棉花の種子、紡績機械購入の5年間免税措置とインフラ整備、棉花栽培を指導する報告書の作成、見本市の開催であった。また1863年の5月には政府は帝国各地に295トンの棉花の種を配布した。Dölen,(1992), pp84-85、Narettin ,(1971), pp.7-9.

<sup>108</sup> 政府に従った遊牧民の族長達には多くの土地が分与され、部族民をその小作人とする地主制度が定着した。この時期、帝国内の裕福なアルメニア人が棉花に注目し、アダナの肥沃な土地の買占めを行なった。また1864年にはクリミア半島から1978年にはバルカン諸国からの移民が、労働者として定住した。Hinderick and Kıray,, (1970), pp.63-83.

<sup>109</sup> 特にドイツは、オスマン帝国政府の支援をうけDLBG (Deutsche Levantinische Baumwolle Gesellschaft)社が進出し、米棉の移植もおこなったとされる。1906年にはアダナで生産される棉花の20%、1913年には75%がドイツ向けに輸出された。Gençer,(2000), pp591-599.

た<sup>110</sup>。アダナでは、国内棉花生産量の約3割、多い年には6割が栽培された<sup>111</sup>。

繊維産業についてみると、1835年に官営フェスハーネ工場(Feshane Fabrikası)がイスタンブールに設立され、これ以降国内各地に官営工場が設立された。1860年以降は、民間資本によってコンヤ、イズミル、アダナ、トロスなど棉花生産地の近郊に工場が設立された<sup>112</sup>。このような近代的工場では、12番手までの綿糸が錘紡されていた。当時、国内消費に占める国産品の割合は、綿糸が20.6%、綿布が9.5%という低い水準にあった。他方、輸入に占める繊維製品の割合は全体の23~25%に達していた。オスマン帝国末期のトルコでは、ヨーロッパ諸国に棉花を輸出し、綿製品を輸入していた。

## (2) 共和国における輸入代替政策と原棉問題

トルコでの棉花栽培と繊維産業の状況は、1930年代以降の共和国の経済政策の実施によって大きく変化した。共和国初期でも1920年代までは、棉花を輸出し、繊維製品を輸入する構造に変化はなかった。また第一次世界大戦の開戦により、トルコは国土が戦場となり、農地が荒廃し、工場の多くが稼働停止となっていた<sup>113</sup>。このような共和国政府は1923年に、イズミル会議を開催し、民族産業の保護と育成を表明した。1927年には産業奨励法を改正して、製造業企業への国産原料の優先的使用の義務付けや、繊維産業に重点に置くことなどを決定した。また1930年には、産業会議が開催され、各産業の状況が取りまとめられた。この会議では、繊維産業の代表者が出席し、輸入代替の必要性を強く唱えた。国営繊維工業のバクルキョイ(Bakırköy Bez Fabrikası)工場の経営者ファズル・ベイ(Fazlı Bey)は、「現在輸入される綿糸3,645,413キロ(kg)のうちの93%を、国内産棉花で生産することが可能である。」と主張した。さらに、「(国内生産が可能な綿糸である)14番手以下は、全体の52%(1,889,659キロ)、24番手までが41%(1,483,803キロ)、24番以上は2.4%(271,915キロ)である。」と述べ、このうち24番手以下の綿糸の国産化を唱えた<sup>114</sup>。1931年に開催された農業会議では、棉花移植研究所の所長ケマル・ベイ(Kemal Bey)が、「今後、我々の(アダナ産の)棉花はその信用を高め...

<sup>110</sup>19世紀のオスマン帝国の国際貿易については、D.İ.E (1995)を参照。

<sup>111</sup>Ansiklopedisi Yayın Kurulu(1981), p.38.

<sup>112</sup>アダナでは1864年にフランスの技術者によって紡績工場が、1887年には国内初の水力タービンを有するマブロアイダティ(Mavromati)工場が設立された。その後1885年に少数民族のH.トラパニ兄弟(Havace Tirpani)がヨーロッパから2,688の紡績機と50台(後に173台に増加)の織機を購入しトラパニ工場を設立。20世紀初頭には、カイセリの少数民族出身のシミヨンオウル(Aristidi Kosma Simyonoğlu)がシミヨンオウル工場(後のMilli Mensucat工場)を、エジプト出身のレシム・ベイ(Resim Bey)がレシム・ベイ工場を設立した。20世紀の初めには、4つの近代的工場で、年間約28,000バール(bale)の棉花が原料として使用された。Adana. Adana Sanayi Odası,(1994).

<sup>113</sup> Keyder, (1994), pp.42-60.

<sup>114</sup> Kılımcıkaya,(1930),1930 Sanayi Kongresi.

繊維製品の輸入のために国外に流出している資金を国内に留め、国内で生産及び消費するための努力が必要である。」とし、輸入代替と棉花の品質向上を訴えた<sup>115</sup>。

1931年の第5回共和人民党大会では、党の方針として明確に輸入代替が示され<sup>116</sup>、エタリズムが採択された。1933年に政府は、「第1次5ヵ年産業政策<sup>117</sup>」を発表し、繊維産業及び鉄鋼業を支援することを決定した。直接の業務を統括するシュメル銀行が設立され、外国人及び非イスラム教徒が所有していた工場の買収と新たな国营工場の設立が進められた<sup>118</sup>。このような綿紡績工場には、近代的な機械設備が導入され、中繊維以上の米棉品種の棉花が原料として使用された。

繊維製品の輸入代替が進むにつれ、原料となる棉花の品質の問題が浮上した。先のケマル・ベいの報告でも指摘されたように、アダナ産棉花の品質が問題となった。当時、代表的な棉花栽培地は、地中海沿岸のアダナとエーゲ海沿岸のイズミル近郊の2箇所であった。イズミル産の棉花は、繊維の長さが18～22ミリ(mm)であるのに対し、アダナ産は16～20ミリであった<sup>119</sup>。1932年にアメリカ人の棉花栽培専門家クラーク(Mr. Clark)が作成した報告書によれば、当時国内の近代的紡績工場では、18～22ミリの棉花が2,815,000キロ、22～24ミリが7,850,000キロ、24～26ミリが7,800,000キロ、28～29ミリが3,800,000キロ使用されていたとある<sup>120</sup>。つまり16～20ミリのアダナ産の棉花は、工場用としては最低級の品質であったのだ<sup>121</sup>。新たに設立された工場では、このうち22～30ミリの棉花を使用していたため、アダナ産棉花のほとんどがこの基準に達していなかった。

そのため繊維産業の国産化には、米棉品種が必要であるとの報告が次々に提出された。クラークは、「米棉移植には、アカラ種とクレブランド(Cleveland)種が最も適している。」と述べている。また、ロシアの専門家は、「棉花改良と配布、そして移植が軌道に乗るまでは外国から棉

---

<sup>115</sup> 日本ではアジア市場に向けて低番手の綿糸を輸出したことが川勝平太の一連の研究によって示されている(川勝(1981))。トルコにおける綿糸の番手に関する先行研究は少なくその説明は今後の研究課題である。

<sup>116</sup>1931年の第5回共和人民党大会では「6本の矢」といわれる同党の6原則が発表された。国家が直接的に積極な役割を果たす機構のことである。護(1968), p101.

<sup>117</sup>1934年に始まる「第1次5ヵ年産業政策」では、1)トルコ産原料による国内市場向けの製品を製造する工場、2)国産原料により輸出向け完成品・半成品を製造する工場、3)国内市場の不可避な需要をまかなうための輸入原料を使用する工場、を国家管理下におくこととした。また、化学、窯業、鉄鋼、紙、セルローズ、硫黄鉱、銅鉱、棉花、羊毛、大麻、海面工業も国家管理の下に置かれることとなった。Rustow, (1964), p.164.

<sup>118</sup>1935年にはカイセリ(Kayseri)に1937年はナズィリ(Nazili)とエラズル(Erzgü)に、1938年にはブルサ(Bursa)、1939年には(マラティヤ)Malatyaに繊維工場を設立した。Dölen,(1992), pp.439-445.

<sup>119</sup>Aydemir (1939) *Pamuk işleri çalışma raporu, Birinci köy ve ziraat kalkınma kongresi B serisi Takım 6*, p.7.

<sup>120</sup>Tekeli,(1982), p.130.

<sup>121</sup>Kılımcıkaya,(1930), p.9.

花を輸入しないことが重要である」と述べている<sup>122</sup>。このような報告書が、1934年の「棉花栽培計画」のアウトラインとなり、2903号<sup>123</sup>「棉花改良に関する法案」と2582号<sup>124</sup>「メリノス種の定着と改良棉花の種子の生産に関する法案」の土台となった。

1936年にアダナを訪れた後のトルコ共和国第2代大統領イスマット・イノニユ(İsmet İnönü)は、「チュクロバ地方から毎年500,000ベール(bale)<sup>125</sup>の棉花を望む。」と発言した。アダナでの生産量が、当時年間100,000~150,000ベールであったことを考えると、彼の言葉には、アダナの棉花栽培の潜在能力に対し大きな期待が込められていたことが伺える<sup>126</sup>。

共和国初期のトルコでは、原綿を輸出し綿製品を輸入していた。これに対し政府は、24番手以下の製品の国産化を目標に掲げた。そのため、近代的工場の原料となる22~30ミリ以上の中・長繊維の原綿が必要となった。こうして綿製品の輸入代替には、中・長繊維の米綿種の生産が前提となったのである。

オスマン帝国末期に試みられた、民間資本による米棉品種の普及とは異なり、1930年以降の米棉品種の普及は、綿製品の国産化をめざす政府によって推進された。政府は、種子の改良、作付け、価格、輸出量などを検討し、包括的な移植政策を設計した。以下では、政府による米棉の普及政策と、それによって生じた季節労働の増加への対応に注目し、米棉普及の成功要因について明らかにしていく。

## 2 アダナにおける米棉花の普及と季節労働者の推計

### (1) アダナにおける在来種の特徴と米棉品種の普及

トルコの在来種(Yerli)は、オスマン朝時代にインド原産でシリア、イラクを經由してアナトリア半島に広まったシロバナワタ(ゴシッピウム・ヘルバゲウ: *Gossypium Herbaceum*)という品種である。このシロバナワタの特徴は、雨には強いが、生産性は低く、繊維が太く短かった。また、明るいクリーム色で原綿の重量に占める繊維の割合は28~29%とされた。同じ在来種でも、エーゲ海沿岸部とアダナでは種類が若干異なり、前者にはマイドス(Maydos Yerlisi)、赤色種(Kırmızı Yerlisi)が広まり、後者にはマイドス種に近い在来種(Yerli)が広まった。繊維の長さは、エーゲ海地域のマイドス種が24.4ミリ、赤色種が25.4ミリであった。これに対し、アダナの在来種<sup>127</sup>の長さは、18~23ミリ、平均しても21.23ミリであった<sup>128</sup>。つまり高品質の棉花でも、12番手

<sup>122</sup>Tekeli, (1982), p.131.

<sup>123</sup>Kanun No. 2903, *Pamuk İslahı Kanunu*.

<sup>124</sup>Kanun No. 2582, *Merinos Koyunları Yetiştirilmesi ve İslah Edilmiş Pamuk Tohumu Üretilmesi Hakkında Kanun*.

<sup>125</sup>1ベール(bale)=約234kg. Adana Ticaret Borsası (1953), *Pamuk ve Tahıl 1949-50*.

<sup>126</sup>Toros, (1941), Adana, p.17.

<sup>127</sup>在来種は大きく5つに分類される。高品質なものからダー・マル(Dağ Malı)、カプ・マル(Kapı Malı)、コザジュ・パルラウ(Kozacı Parlağı)、マキナ・パルラウ(Makina Parlağı)、ピヤッサ・テミズリ(Piyasa Temizi)となる。ダー・マル(Dağ Malı)

から 13 番手の綿糸を常紡としていた。そのため多くの棉花は工業用原料には不向きであり、低級品として輸出されるか、自家消費とされた<sup>129</sup>。在来種のもう一つの特徴としては、繊維が短い点に加え、摘み取り時期にはコットン・ボールの形状は幾分閉じていたことから、別名「閉じた棉花(Kaplı Mah)」と称されていた。

アダナにおける米棉品種の導入と品種改良の取り組みは、この地の開墾と同時に始まった。はじめに導入された米棉品種は、1887 年にエジプト経由のイーネ(İane)種であった。1913 年にこの地を訪れたフランス人が、ドイツ人の長繊維の棉花栽培の試みを報告している。「ドイツ人はエジプト産の棉花の導入を試みたものの、水不足、開絮時の気温、摘み取りの季節における天候の問題などによって、失敗に終わった。」とある<sup>130</sup>。また、1932 年のクラークの報告書では、「アダナでは 1891 年以降、アップランド(Upland)種のなかでも、エクスプレス(Express)種および在来種よりも少し繊維が長いイーネ種の移植がおこなわれていた。」と記載されている<sup>131</sup>。このような共和国以前の民間主導による米棉品種は、アダナの気候には合わず、どれも定着には至らなかった。

これに対し、共和国においては政府主導によって米棉の普及が実施された。政府は、1934 年に 2903 号「棉花改良に関する法案」、1934 年に 2582 号<sup>132</sup>「メリノス種の定着と改良棉花の種子の生産に関する法案」を制定した。1924 年に設立されたアダナ研究所(Adana Araştırma İstasyonu)に加え、1934 年に新たにナズイリ研究所(Nazilli Araştırma İstasyonu)を設立し、米棉の改良・開発のセンターとし、米棉移植事業に本格的に乗り出した。2 つの研究所にはアメリカ人のクラーク、ドイツのマルクス(Dr.Maruks)、ベルギーのバイレクス(G.Bailleux)など外国人専門家が招かれた。また棉花栽培に関する世界各地の資料、報告書、最新の機材が集められ研究が進められた。米棉品種の定着には、風、病気、かんがいの有無、といった様々な要因が影響するため、導入する品種の選択とその改良が必要であった。研究所で選択された棉花は、隣接する実験農場でトルコ各地の風土に合わせた改良が加えられ、最終的にクレブランド種とアカラ種の改良に成功することとなる。

政府は、この結果をもとに、東部および南東部におけるクレブランド種の作付け、および西アナトリアにおけるアップランド種のアカラ種の作付けを決定した。クレブランド種もアカラ種と

---

は繊維の長さが 18mm、20 番手を紡出し、ピヤッサ・テミズリ(Piyasa Temizi)は 6-10 番手とされた。

<sup>128</sup>マイドス種のコットン・ボールが緑色で小さいのに対し、赤色種はその名の通り開花前は赤みがかっており、生産性と紡績工程の消耗はアダナ産の在来種より少なかった。

<sup>128</sup> *Yurt Ansiklopedisi*, (1981), pp.38 -39.

<sup>129</sup> Dölen, (1992), p.79.

<sup>130</sup> フランスはドイツに先駆けてアダナに進出した。Gençer, (2000), pp.591-599. フランス人 Tsapolos と Walther は 1911-12 年にかけてアダナを訪れ報告書 (*Domanie Imperial de Tchoucour-ova*) を作成した。

<sup>131</sup> Sayar, (1966), pp.6-7.

<sup>132</sup> “Kanun No. 2582, Merinos koyunları yetiştirilmesi ve islah edilmiş pamuk tohumu üretilmesi hakkında kanun.

同じくゴッシピウム種の系統に属する中繊維の品種であった。

政府は、米棉移植の決定と同時に、指定された品種以外の米棉品種の栽培を禁止することを発表した。また禁止された品種を栽培した場合、トラクターなどで粉碎され、強制的に廃棄された。また国営紡績工場でも、米棉品種以外の棉花を原料として使用することを禁止した。

1940年代はじめ、ナズィリ研究所で開発されたアカラ種は、エーゲ海地域において定着に成功し、普及が始まった。アカラ種は、リクチメン(*Gossypium Hirsutum*)に属する中繊維の品種である。メキシコのアカラ村で発見され、アメリカのテキサス及びカルフォルニアで改良された。繊維の特徴は、絹のように柔らかく、白色、長さは平均して27~28ミリとされた。平均して40番手あたりを常紡としていたが、高品質のものは50~60番手まで紡出が可能で、また原棉の重量に占める繊維の割合は35~38%とされた<sup>133</sup>。

1946年政府は、アカラ種の方が、アダナに導入されたクレブランド種よりも品質、生産性、繊維の長さの点で優れていると判断し、アダナでの1946年以降アカラ種の栽培への変更と、これまでのクレブランド種の作付けの禁止を正式に発表した<sup>134</sup>。アカラ種は、アダナ研究所を通じて、まずハジュ・アリー(Hacı Ali)国営農場で栽培され、その種子が生産者に配布された<sup>135</sup>。

表1は、アダナ農業取引所で調査をおこなった棉花機械繰り用の在来種およびアカラ種の1級と2級の最安価格と最高価格を示している。表によれば、1943年のアカラ種の1等の最高値は95クルッシュであり、同じ年の在来種の最安値の74クルッシュに比べ3割近く高値であった。またアカラ種の2等の最安値の88クルッシュと在来種の最高値の74クルッシュを比べてみても、アカラ種が2割ほど高値で取引されていた<sup>136</sup>。1941年のトゥラン製油工場(Turan Yağ Fabrikası)の報告書では、「アダナの在来種は国内の品質の標準を下回るが、アカラ種は平均を上回っていた。アカラ種の需要は高く、市場でも高値で取引されていた。」と記されている<sup>137</sup>。

アカラ種の実産性は、1ヘクタール(ha)当たり150~159キロとなり、この値は在来種を上回っていたとされる。しかしアカラ種の問題点は、特に雨などの天候条件及び灌漑の有無によって大きく品質が左右され栽培にはリスクが伴った。それでもアカラ種は、在来種やこれまでの米棉品種に比べて、品質、需要、価格、生産性が上回っていたため、急速に普及した<sup>138</sup>。

<sup>133</sup>Abidin,(1933), pp.208-258.

<sup>134</sup>Aydemir (1939), Dölen,(1992), pp.78-79.

<sup>135</sup>Hinderick and Kıray(1970)の調査によれば、面積11,000ドヌム(1ドヌム=919m<sup>2</sup>)、1930年代品種改良の実験農場としてアダナ研究所(Adana Araştırma İstasyonu)に隣接して設立された。ドイツ人のソスキン(Soskin)の指導のもとアダナの近代的農業を普及に努め、改良品種の棉種を配布した。Hinderick and Kıray, (1970), pp.26-92.

<sup>136</sup>Adana Ticaret Borsası, *Pamuk ve tahıl 1949-50*, (1953), pp.118-119.

<sup>137</sup>Sezen,(1941),pp50-51.

<sup>138</sup>1940年のはじめ、アダナでは250ドヌム(dönüm)の土地から収穫できる棉花の価格は416,250クルッシュ(Kuruş)であったのに対し、240ドヌムの土地から収穫できる小麦が240,000クルッシュであった。つまり、棉花の生産額は小麦に比べ1.65倍であることから、農家は棉花栽培を嗜好した。

表 1 在来種とアカラ種の価格の推移 1941-1950

単位(クルッシュ)

年	在来種		アカラ 1等		アカラ 2等	
	最安値	最高値	最安値	最高値	最安値	最高値
1941	48	52	63	66	-	-
1942	50	64	75	78	-	-
1943	72	74	94	95	88	91
1944	103	109	138	144	124	134
1945	98	120	122	140	111	123
1946	95	107	123	130	90	120
1947	95	95	124	125	112	120
1948	130	148	146	170	155	165
1949	154	189	185	275	161	250
1950	105	175	181	250	156	213

(出所) Adana Ticaret Borsası, *Pamuk ve Tahıl 1949-50*, Adana, 1953, pp.118-119.

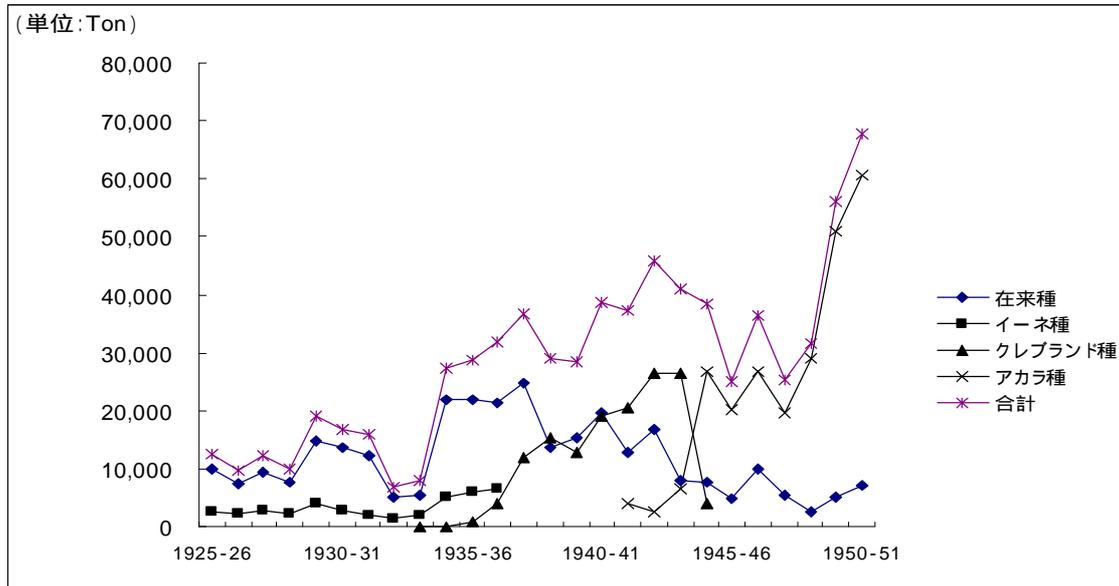
図1は、アダナ商工会議所の報告書をもとに<sup>139</sup>、1956年までの品種別の生産量を示している。この図から、すでに米棉品種のクレブランド種が導入されて以降の1940年代においても、在来種が最も生産されていたことが確認できる。しかし、アカラ種の導入が始まると、在来種の実産量は急速に減少していく。政府の決定に先立ちアカラ種は1941年に市場に登場し、1944年から1945年にかけて急速に生産量を伸ばした。1950年から1951年にかけては、前年の2倍に達している。これに伴い在来種の実産量は減少し、1943年から1944年には半減、1955年までに市場からその姿を消した。

表2は、共和国初期の1923年とアカラ種の普及に成功した1949年におけるアダナとその近郊にある近代的な工場とその設備を示している。当時、シュメル銀行傘下の国営工場がアカラ種の代表的な購入先とされた。この銀行傘下の繊維工場は国内に6箇所あり、アダナ工場(Adana Fab.)とカイセリ工場(Kayseri Fab.)が、アダナの近隣にあった。

---

<sup>139</sup>また、商工会議所ではいくつかの郡における在来種とアカラ(Akala)種ごとの生産量と作付面積の調査も行っていた。Adana Ticaret ve Sanayi Odası,(1946-47,1947-48, 1948-49).

(図 1) 品種別棉花の生産量の推移 1925-1951



(出所) Adana Sanayi Odası, *Cumhuriyetin 60 yılında Adana Sanayii*, Adana, 1994 から筆者作成。

表 2 アダナ近郊にある繊維工場 1939 年と 1949 年

	繊維工場	設立地	設立年	錠数	力織機台数	錠数	力織機台数
国営企業	カイセリ工場	カイセリ	1935			32,520	1,062
	アダナ工場	アダナ	1895	3,220	80	11,558	176
民間企業	チュクロバ製織タルス工場	タルス	1887	5,000		21,696	248
	ラシム製織工場	タルス	1911-1912	7,000	131	18,800	208
	チュクロバ製織メルシン工場	メルシン	1905			14,600	
	ミッリー製織工場	アダナ	1898	3,000	51	19,636	300
	エルジェスイ紡織工場	カイセリ				1,200	20
合計				3,220	80	44,078	1,238

(出所) 1923 年は Selim İkin, "Üretimden Tüketime Pamuklu Dokuma", *ODTÜ Gelişime Dergisi*, 1987, pp 6-7, 1949 年は Adana Sanayi Odası(A.S.O), *Türkiye 'de Pamuk İpliği ve Pamuklu Mensucat Sanayi*. Ankara, 1958, p.11.

一方 1923 年にはアダナ工場の設備は 3,220 錘と 80 台の織機であったが、1949 年には 11,558 錘、176 台に増加した。カイセリ工場に関する報告書では、原料として 18～20 ミリの在来種を 3,000 ベール、また 26 ミリのクレブランド種を 3,000 ベール使用していたとある。だがその 3 年後の 1938 年には、在来種 7,340 ベールに対し、約 5 倍のクレブランド種 1,6000 ベールが使用されていたと記載されている<sup>140</sup>。

政府の普及政策は、品種改良の支援にとどまらなかった。棉花の輸出量は、国内需要の超過分と定め、国内の工場に優先的に供給することを決定した。また米棉品種の価格については、まずシュメル銀行傘下の紡績工場で、春先に買い取り価格を決定し、生産者に提示した。また国営工場に卸す場合には、生産者は収穫前に契約する必要があった。当時、市場取引でも価格が決定されていたが、この市場価格も概ねシュメル銀行の買い取り価格に連動した。シュメル銀行傘下の工場ではアカラ種のみを原料とした。米棉品種の事前の買付け契約は、国営工場に安定的に原棉を供給することが目的であった。また当時、米棉品種は大規模な農場で生産されていた。生産者に対し事前に価格を提示するのは、生産者のリスク軽減し、普及を促進させる意図もあった<sup>141</sup>。

政府は、アカラ種の普及の成功を受け、「緊急第 2 次 5 ヶ年奨励計画」で、シュメル銀行傘下の工場への設備投資を検討し、1950 年から 1952 年に、紡機 9,396 錘、織機 1,000 台の導入を決定した。

またアダナには、民間部門に 5 つの近代的工場が存在した。1923 年には紡機 5,690 錘、力織機 182 台であったが、1949 年には 75,932 錘と 776 台と増加した。1950 年代に入ると、民間の資本家によって国内最大規模の工場が次々と設立された。彼らは、米棉栽培及びその取引で富を蓄積した者で、政府の融資を受けて工業部門へと進出していく。1950 年代以降、アダナは繊維産業の中心地として成長を遂げる<sup>142</sup>。

---

<sup>140</sup>İşleri (1935), pp.131-133.

<sup>141</sup>Türkiye Ticaret Odaları (1958) Sanayi Odaları ve Ticaret Borsaları Birliği, p.68

<sup>142</sup> 1923 年に近代的な繊維工場が国内に 32 箇所存在し、大規模なものは 11 箇所であった。İlhan,(1987).

## (2)季節労働者の増加とその推計

米棉品種の普及の成功により、アダナにおいて棉花栽培が急速に拡大した。しかし、在来種と米棉品種の植物学的な違いから、新たに労働力不足という問題が浮上した。

在来種は、コットン・ボールが開裂しても棉花はあまり開かず少しつぼんでいるため、収穫の際には朔ごと摘み取られた。これに対して、米棉品種はコットン・ボールが大きく開き、棉は外側に大きく盛り上がっていたため、棉と朔を分けて摘み取られた<sup>143</sup>。この方法は、そのまま朔ごと摘み取る方法よりも手間がかかり、摘み取りに 2 倍以上の時間が必要とされた<sup>144</sup>。また改良品種のアカラ種は、風雨に晒されることで品質が著しく低下し、価格が下がるため、雨季が来る前に摘み取る必要が生じた<sup>145</sup>。つまり米棉品種は在来種に比べ、収穫に 2 倍の時間を要する上に、短期間に収穫を終らせる必要が生じたのである。そのため米棉品種の栽培にともない、短期間に大量の労働者が必要となった。

1950 年代にアダナで社会調査をおこなった Hinderick and Kiray(1970)は、米棉品種の普及に伴い、摘み取りの時期に労働者不足が生じた事を報告している<sup>146</sup>。1970 年代には、東部のクルド人地域から季節労働者が大量に流入し、社会問題に発展した。政府及び国際機関は、季節労働者の就労条件及び生活環境など人権問題に関する調査を実施した。

このような季節労働者の存在は、米棉導入以前から確認されている。また第二次世界大戦後に、季節労働者が増加した事は広く認められているが、その人数に関する記述は断片的にしか存在せず、まして統計は皆無であった。そのためその実態、発生及び拡大のメカニズムもこれまで明らかにされてこなかった<sup>147</sup>。以下では、品種別の棉花の生産量と摘み取り期間、1 人の季節労働者の 1 日に摘取る量の違いから、労働者数の推計を試みる。

まず在来種は、コットン・ボールが開裂しても棉花は少しつぼんだ形状であった。そのため、棉実と朔と一緒に摘みとられていた。そのため棉実と朔を分けて摘み取るアカラ種より、手間も時間も少なく済んだ。1 日に 1 人の労働者が摘み取る重さは、約 100~120 キロであったと報告されている。労働者の過大評価を避けるため、多めの 120 キロを使用する。また在来種は、風に強く、雨に晒されても品質の低下が少ないため、雨季に入っても摘み取りが続けられた。そのため、収穫期は短く見積もっても 9 月上旬から 10 月下旬までの約 6 週間である<sup>148</sup>。

その年に生産された在来種の総生産高を、1 人の労働者が 6 週間(42 日間)で摘み取る量で除した数が、総労働者数となる。労働者が 1 日に 120 キロを摘み取ったならば、6 週間で

---

<sup>143</sup>Sarsar,(1964), p.17.

<sup>144</sup>Adana Ticaret Borsası,(1944-1945.), p.282, Abidin,(1933),p. 256 では、4-5 倍の差があったと報告されている。

<sup>145</sup>Hinderick and Kiray, (1981), pp.82-83.

<sup>146</sup>Tekeli,(1982),p.130.

<sup>147</sup>近年の棉花の季節労働者に対する研究としては、Yildirak(2003)、星山(2003)が挙げられる。このような研究では、季節労働者が女性や子供であることを指摘しているが、1940 年代の記述ではそのような点は確認されない。米棉の普及に伴って形成された可能性を推測できるが、この点に関しては今後明らかにすべき問題である。

<sup>148</sup>Dölen,(1992),p.91.

5,040 キロ(120 キロ×42 日)を摘み取ったことになる。

よって在来種の摘み取りに必要な労働者の合計は、

在来種の摘み取りの労働者数 = (在来種の生産量)/(120 キロ×42 日)となる。

他方、アカラ種では、季節労働者が1日に摘み取る棉花の重さは平均して50キロ～60キロとされた。なかには100キロ近くを摘むことのできる者がいたとの報告もあるが、分析には平均を若干上回る60キロを採用した<sup>149</sup>。またアカラ種は、風に弱く、雨に濡れると著しく品質が低下するため価格が下がる<sup>150</sup>。雨に晒された棉花は、商品価値がなくなるため摘み取られないとの報告もある<sup>151</sup>。そのため雨季に入る前に、棉花を摘み取る必要があった。表3はアダナの気候を示している。

これをみるとアダナでは10月に入ると降水量が急増する。よって摘み取り期間は、棉花が開花する9月初旬から雨季が始まる9月末までの約3週間と推測される。この収穫期間については、当時の複数の報告書と同じである<sup>152</sup>。

表3 1931 - 60 年におけるアダナの気候

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
最高気温(C)	14.4	15.8	18.8	23.4	28.1	31.9	33.9	34.9	33	29	22.6	16.8	25.2
最低気温(C)	4.6	5.5	7.5	10.9	14.9	18.8	21.8	22.2	18.9	14.5	10.3	6.3	13.0
湿度(%)	110.7	93.2	65.8	44.5	47.0	18.3	3.7	5.4	16.5	41.9	62.1	101.9	-
平均気温(C)	9.1	10.2	12.7	16.9	21.2	25.0	27.6	28.0	25.2	20.8	15.5	10.9	18.6

(出所) Kasım Ener et al., *ADANA Yıllığı 1967*, Adana, 1968, pp.59 – 60.

<sup>149</sup>Dölen, (1992), p.91.

<sup>150</sup>アダナ商工会議所の規格では、アカラ種は繰り綿機の種類によって2つにまず分類され、その次に雨にどの程度ぬれたかで1等から3等までに分類された。

<sup>151</sup>通常アダナの棉花の摘み取りでは3回まで可能である。3回目はバシャックジュルク (Başakçılık) と呼ばれる。この時期になると雨に濡れ、価格も下がる。作業の時間がかかる上に、収穫できる量が少ないため季節労働者は採算に合わないとして、摘み取りをおこなわず、農村内部の小作人で摘み取りがおこなわれることが多かった。

<sup>152</sup>Hinderick and Kıray, (1970), p.27 は3週間とする。Yurt, p.75 では2 - 3週間とされる。8月15日から9月初めとする記録もあるが、収穫期間は3週間となっていた Sarsar, (1964), p.18

その年に生産されたアカラ種の総生産高を、1人の労働者が3週間(21日間)で摘み取る棉花の量で除した数が、アカラ種の総労働者数となる。労働者が1日に60キロを摘み取るならば、3週間で1,260キロ(60キロ×21日)を摘み取ったことになる。

アカラ種の摘み取りに必要な労働者の総数は、

アカラ種の摘み取りの労働者数 = (アカラ種の生産量)/(60キロ×21日)となる。

在来種とアカラ種の摘み取りの労働者を合計した数が、その年の棉花の摘み取りにかかった労働者の総数となる。

つまり、

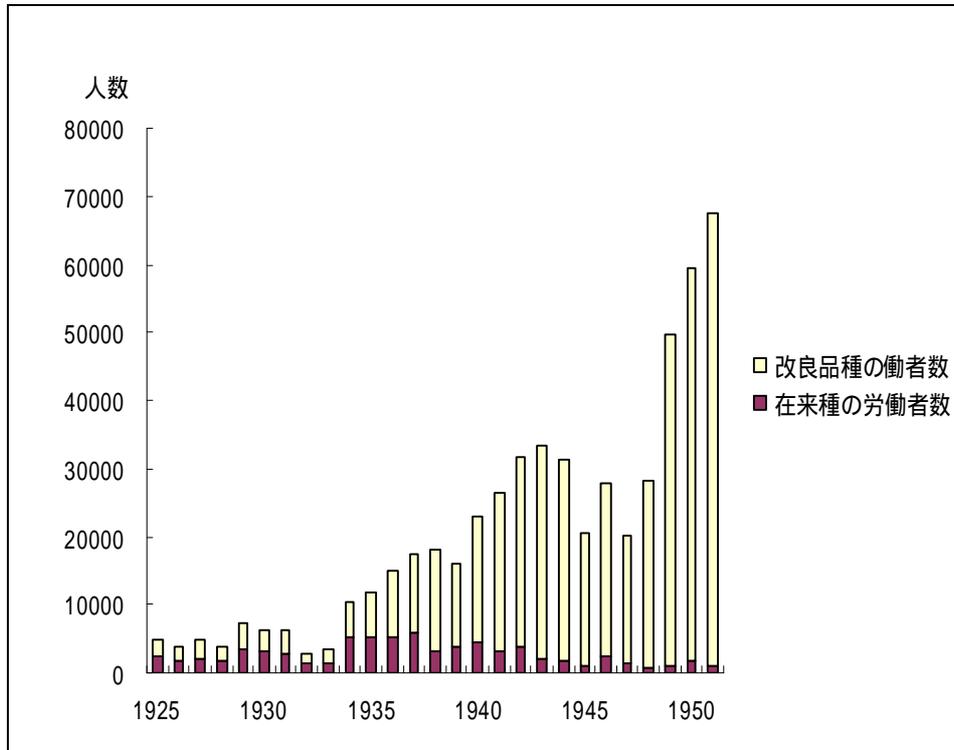
摘み取りの労働者数 = (在来種)/(120キロ×42日) + (アカラ種)/(60キロ×21日)

となる。

1925年から1956年における、アダナの品種別の生産高と労働者数の推計結果を図2に示す。棉花の生産量は、1932年から1933年には世界恐慌の影響で、一時期は生産量が低下したものの、1940年代には1925年の水準の3倍に達している。また第2次世界大戦の影響で、1945年から1948年には生産量は再び減少するが、1949年からは増加に転じ、1925年の水準の約4倍、1955年以降では約5倍の伸びを示した。米棉品種の普及率は、共和国初期の1925年には、わずか2割程度であった。1940年には5割、アカラ種の作付けが本格化する1944年には8割となり、1955年には大部分が米棉品種となった。

推計結果をみると、摘み取りに必要な労働者数は1925年には5,000人であったのが、1940年代には20,000人から30,000人、1949年までに50,000人に達した。つまり、1930年代後半には1925年の水準の約3倍、1940年代には約5倍、1949年は約10倍となった。特に1949年は前年比の約2倍の伸びを示している。1940年代中頃に生産量の低下によって、労働者の数の一時的な減少がみられたものの、アカラ種が普及する1948年以降では、急速な増加を示している。

(図 2) 季節労働者の推計



(出所) Adana Sanayi Odası, *Cumhuriyetin 60 yılında Adana Sanayii*, Adana, 1994 から筆者作成。

これまでの先行研究では、この時期の季節労働者の増加について、主にトラクター普及との関係が指摘されてきた。この点についても簡単に検証をおこなう。表 4 はアダナの棉花生産とトラクター台数を示している。

共和国初期の 1924 年には、509 台が存在し、このうちアダナには 69 台が導入されていた。1946 年には 262 台であったが、1948 年から 1952 年の間に 4,030 台に増加している<sup>153</sup>。この増加は、マーシャル・プランの援助金によるものであった。

トラクターの普及は、農村内部の構造に変化をもたらしたことは広く知られている。2 頭の牛に引かせる伝統的なカラサバン鋤で耕せる面積は、1 日に 40 ドヌム(約 40 ヘクタール)であった。これに対し、トラクターはその 10 倍の 400 ドヌム (約 400 ヘクタール)を耕作することができた。そのため、「一台のトラクターは 10 人の小作人を農村から追い出す。」とも称された<sup>154</sup>。そのためトラクター導入によって、没落した小作農が、都市部に流入し、低賃金の工場労働者及び季節労働者になったという指摘もなされている<sup>155</sup>。しかしトラクターの導入が棉花栽培に影響するのは、春の鋤入れ作業と耕地面積の増加である。そのため季節労働者の増加については、トラクターの導入による効果と米品種の普及の効果に分けて分析する必要がある。

表 4 における棉花栽培地の面積及び生産性をみると、1940 年から 1950 年の間に耕作地は 200,000 ヘクタールから 250,000 ヘクタールへと拡大しているのがわかる。仮に、この増加分が小麦等の耕作地からの転換や伝統的なカラサバン鋤によるものではなく、すべてトラクターによって達成されたとしても、この間の作付け地の増加は 25%である。また1ヘクタール当たりの生産性の上昇は 150 キロから 180 キロの 30 キロであった。よって、この間の生産性の上昇は 20%である。

先の耕作面積の増加と生産性の上昇を合わせると、この間の生産量の増加は 50%の増加、つまり 1.5 倍であったと推測できる<sup>156</sup>。これに対し、1945 年から 1952 年における摘み取りの労働者の推計は、約 20,473 人から 71,277 人へと約 3.5 倍の増加を示している。耕作地の増加をすべてトラクターによる影響とみなしても、それだけでは季節労働力の増加を説明できない。むしろ米棉品種の普及の効果の方が大きかったことを示唆する結果といえる。

---

<sup>153</sup>Yurt Ansiklopedisi(1981), pp.80-81.

<sup>154</sup>Murat (1986)の農村の労働者に対する社会調査では、農業労働のうち 65%がかつては小作人 (Ortakcilik) であったと報告している。また棉花の需要拡大によって、棉花に特化した農業の度合いは強まり、従来的小麦との二毛作の体系は崩壊、休閒地が急速に縮小したと指摘している。Murat (1986)を参照されたし。

<sup>155</sup>Robinson,(1952).

<sup>156</sup>全体の生産量は、200,000 トンから 250,000 トンに増加した。

これまでの研究で、米棉品種の普及よりトラクターの影響が重視されてきた背景として、2つの点を指摘できる。まずトラクターの導入がマーシャル援助によるものであることから、それに対する報告書が数多く作成され、資料として保管されている点である。第2に、季節労働には、男性による鋤入れ及び除草の時期の労働者と、棉花の摘み取りの際の低賃金で働く女性労働の2種類がある。そしてトラクターの導入によって前者の季節労働者が、またアカラ種の普及によって後者の労働者が増加した<sup>157</sup>。この2種類の季節労働者が存在し、2つの要因が同時期に発生したことで、季節労働者が増加した要因が混同されて、これまで米棉品種の効果が過小評価されておもわれる。しかし、本章の推計によって、1940年代末からの労働力の増加の多くは、米棉品種の導入によって生じたことが明らかになった。

表4 アダナの綿花生産とトラクター台数

	作付け面積 (1,000ha)	生産量 (1,000t)	生産性 (kg/ha)	トラクター台数 (台)
1925年	100	15	150	69*
1940年	200	30	150	
1945年	200	30	150	732**
1950年	250	45	180	
1952年				4030***
1956-60年	252	48.4	192	

\*は1924年, \*\*1948年, \*\*\*1952年の台数

(出所) Yurt Ansiklopedisi Yayın Kurulu, *Yurt Ansiklopedisi, İstanbul*, 1981, p.74-75, p.81より筆者作成。

<sup>157</sup>季節労働者の実態は Şeker(1986),を参照されたし。

### 3 季節労働者と季節労働者斡旋制度

#### (1)アカラ種導入以前の季節労働者

アカラ種の普及に伴い、摘み取りへの労働需要が増加したことを明らかにしてきた。このような労働は民間の斡旋業を通じて供給された。以下では、アカラ種の普及の前から存在した季節労働者と斡旋業がいつ頃発生し、どのように形成されたのか、検証をおこなう。

アダナにおける農業労働者の存在は、共和国当初の報告書でも確認することができる。19世紀前半まで、アダナを中心とするチュクロバ平原では、遊牧民が生活していた。そのため棉花栽培を開始するには、農業労働者を他の土地から連れて来なければならなかった。1830年代にエジプトのイブラヒム・パシャがこの土地を開拓した際は、週給の農業労働者が集められたとされる。その際、農業労働者との間で交わされた契約は、「イブラヒム・パシャの契約 (İbrahim Paşa Sozluğu)」と称され、トルコで最初の農業労働契約となった。契約の内容には、1週間の労働日数を5.5日とすること、雇用主が食事と休憩を与えることなどが含まれていた<sup>158</sup>。この内容は、当時の農業労働の条件が平均週6日であったことからみても革新的とみられた。これは、高温多湿でマラリアなど発生する厳しい条件のアダナでは、土地を開墾し棉花栽培をおこなう労働者を探すことが困難であったことから、労働条件が緩和されたと推測できる。その後、19世紀後半にオスマン帝国政府によって棉花栽培が奨励された際には、労働者として遊牧民の強制定住、シリア方面からのアラブ人の移住、バルカン方面からの移住など様々な労働者が使用された。当初アダナの棉花栽培は、大農場で農業労働者を定住させて栽培するアメリカ南部のプランテーション栽培がモデルとされていた。

1909年の林業・鉱業・農業省 (Orman ve Maadin ve Ziraat Mecmuası) の報告書では、「ゴマと棉花栽培の鋤入れの季節には、毎年労働者としてクルド、遊牧民、チェルケス人が周辺地域から集められ、安価な賃金で働いていた。」<sup>159</sup>と記載されている。すでに20世紀初頭には、季節労働者が広範囲から集められていたことが確認できる。1911年から1912年にアダナを訪れた2人のフランス人の報告書では、「遊牧民の人口は100,000人とみられる。彼らは、春から8月までアダナに滞在する。通常収穫の季節は秋まで続く。遊牧民は暑さに弱いため(夏のアダナには)滞在することができない。これに比べイブラヒム・パシャが連れてきたアラブ系の労働者(の子孫)の方が暑さに強い。」とあり、季節労働の存在を指摘している。アダナの夏は高温多湿で、夏に冷涼な山岳地域で生活する遊牧民にとって、平野部での労働は過酷なものとして受け止められたのであろう。さらに報告書では、「この土地には100,000人の近くの労働力が存在する。穀物の栽培には1,500人で十分であるが、もし今後棉花栽培を拡大させるならば労働者を定住させる必要がある。」とあり、季節労働者の必要性が指摘した<sup>160</sup>。1925年の「第2回アダナ棉花会議」の報告書には「アダナでは、かねてより東部及び近隣の高地から年間30,000~40,000人ほどの季節的な農業労働者が2月から12月まで働きに訪れている。」と記

<sup>158</sup>Erkul(1967), pp.53-54, Gençer.(2000), pp.592-593.

<sup>159</sup> *Yurt Ansiklopedisi*,(1981), p.35.

<sup>160</sup> *Yurt Ansiklopedisi*,(1981), pp.35-36.

載されている。このような報告書から共和国の初期頃までに、アダナでは、労働者を定住させるよりも、むしろ季節労働者が選択されたと推測できる。このような労働者は、県内の山岳地帯及び遊牧民であった。

季節労働者の賃金の支給方法として、現物支給と出来高制による現金支払いの、2種類が存在した。先のフランス人の報告書には、「賃金に関しては、2つの支払方法がある。米棉品種の摘み取りに対しては1,282キロに対して15クルッシュを、在来種には10%を現物支給していた。」<sup>161</sup>と記されている。すでにオスマン帝国末期には、高級品と低級品の間で異なる賃金支払い方法がなされていた。これと同様の内容が1925年のヒルミ・ウラン(Hilmi Uran)の報告書にも記載されている。「摘み取り時期には地域内の労働者を使用している。在来種に関しては10分の1が現物で支払われ、米棉品種には収穫量に応じて現金で支払われた。」とある<sup>162</sup>。この2つの異なる支払いが存在した背景には、米棉品種は域内の近代的紡績工場及び海外向けとして商品作物としての価値が高かったため、現金で取引されたためと推測できる。他方、在来種は海外に低級品として輸出もされていたが、自家消費用としての国内の需要も高かったため、現物で支給されても季節労働者によって問題はなかった。アカラ種が普及する以前から、米棉品種の摘み取りに対しては、現金による支払方法が定着していた。

このような季節労働者に対して支払われた金額は、全体の費用のうちどのくらいを占めていたのか。表5は、1945年のアダナ農業組合における棉花栽培地1ha当たりのコストに関する調査結果である。この表をみると、最も費用がかかったのは、除草の90トルコ・リラ、次に土地の30トルコ・リラ、三番目が棉花の摘み取りの27トルコ・リラであった。つまり、季節労働者に対する賃金は、全体の費用の294トルコ・リラの9%であった<sup>163</sup>。

季節労働者の供給元についてみると、当初は近隣の村々及び山岳地域であり、次第に東部など遠隔地へと拡大したと思われるが、いつ頃県外からの季節労働者がアダナで働くようになったかについては、報告書によって異なる。ヒルミ・ウランの報告書には、「1880年から1890年には、季節労働者としてハタイ(Hatay)、マラッシュ(Maraş)、シィバス(Sivas)、ニーデ(Niğde)、カイセリ(Kayseri)コンヤ(Konya)など近隣の地域が供給先となっていた。」とある。また1950年代半ばのHinderick and Kıray(1970)の報告では、「在来種の栽培においては労働供給の調整が取れていた。だが、アカラ種の普及によって、特に摘み取りの9月には、村外さらに他の地域から、大量の季節労働の投入が必要となった。...(季節労働者は)遠方のウルファ(Urfa)県及び東部からも訪れていた。」<sup>164</sup>とし、供給地が遠方へと拡大したことを指摘している。このように季節労働者が円滑かつ迅速に供給されるようになったことで、米棉品種の普及が可能となったことは確かである。以下では、この役割を担った、地域社会に内在する労働者の斡旋制度に着目する。

<sup>161</sup>Gençer,(2000), pp.591-599.

<sup>162</sup>Uran, “Adana zıraat amelesi”, (Yurt Ansiklopedisi , p81 に収録。)

<sup>163</sup>1961年の調査では117トルコ・リラに対し12トルコ・リラと全体の約10.3%であった。Sarsar,(1964), p.156.

<sup>164</sup>Hinderick and Kıray, (1970), p.26.

表 5 1945 年アダナ棉花栽培地 1ha 当たりのコスト

用途	費用
休閑地	50
耕作	14
種まき	12
種子	12
除草	90
摘み取り・保険	27
運搬	10
繰棉	21
税金	2
その他	10
建物	10
土地	30
監督業務	3
合計	291

(出所) Adana Ticaret Borsası, *Pamuk ve Tahıl 1944-45*, 1946, Adana, p.124.

## (2)アカラ種の普及と季節労働者斡旋制度

オスマン帝国末期、アダナに棉花栽培が導入する際、アメリカ南部のプランテーションによる棉花栽培をモデルとしていた。当初は、遊牧民などの強制定住を試みたものの、失敗に終わった。その結果、共和国初期までには、季節労働者による摘み取りがおこなわれるようになった。前節では、1940年代後半のアカラ種の普及に伴い、労働需要の急速な増加を明らかにした。以下では、このような増加に対する政府の対応について検証する。

季節労働者の供給には、現在も仲介業が重要な役割を果たしている。労働者の供給地が棉花栽培地から遠くなるほど、また山岳地域の農村など孤立した地域になるほど、情報の伝達が重要となる。斡旋業者は、必要とされる人数、時期、場所、また労働条件や賃金などの情報をすばやく伝達し、労働者を確保する役割を果たす。トルコ各地では古くからこのような斡旋業の存在が確認されている。その名称も各地で異なり、アダナを中心とするチュクロバ地方ではエリジ(Elci)、もしくはエリジ・バシユ(Elcibaşı)と称された。この他、エーゲ地方でダユバシユ(Dayıbaş)、ナジイリではエナル(Enar)、トラキヤでドラゴマン(Dragoman)、バルクシェヒルでカフヤ(Kahya)、ガジアンティップ及びマラッシュではバシユジュル(Başçıl)と様々な名称で呼ばれるが、そのシステムはほぼ同じであった<sup>165</sup>。

季節労働者の斡旋業は、仕事の内容によって、イシチ・ムタフィティ(İşçi Mütaahhiti:労働者請負人)、エキップ・サーフ(Ekip Şefi:グループ責任者)、イシイベレン・ベキリ(İşveren Vekili:雇用主の代理人)に分かれる。イシチ・ムタフィティは主に、労働者の斡旋・交通費・食事、賃金の支給、エキップ・サーフは労働者間の問題解決から、賃金支給にいたるあらゆる問題を扱った。またイシイベレン・ベキリ(雇用主の代理人)は、単独で行動し、雇用主から前払い金を受け取って労働者を集め、ときには彼らの監督を行った<sup>166</sup>。このような民間の仲介業が、米棉品種の導入の前に、すでに社会システムの中に形成されていたため、農業労働者の供給が可能であった。

トルコ共和国が設立し、1930年代に入ると、政府は都市部の工場労働者を念頭に、民間斡旋制度への法的規制を検討し始めていた。他方で、繊維製品の国産化を優先する政府は、高品質の原棉を安定的に供給するためには、季節労働者が必要であることを認識していた。そのため、政府は農業部門の斡旋業に対する規制を徐々に緩和し、最終的に規制の対象外とした。以下では、Erkul(1967)の研究を参考に、この時期の農業部門の斡旋業の存在をめぐる労働法の変容に焦点を当て、政府が棉花普及にどのように関与したか検討していく。

最初の労働法である3008条<sup>167</sup>「職業安定法」が1936年に制定された。この法律はトルコで初めて、職業斡旋業を法的に定めたものである。その内容は、「政府は労働者に適した職場を供給し、職場に適した労働者を供給するために、民間に存在する制度を整理し、行政サービ

<sup>165</sup>Erkul,(1967),pp.84-86.

<sup>166</sup>Şeker,(1986), *Yurt Ansiklopedisi* (1981),p.85.

<sup>167</sup>Sayı 3308, İş Kanunu,1936.

スとしておこなう。」<sup>168</sup>というものであった。また「この法律が施行されて以降は、営利目的による民間の施設の開業を禁じる。」<sup>169</sup>とし、これまで営利目的で活動してきた民間斡旋業を廃止することを決定した。しかしすでに活動している業者に対しては、突然、活動を禁止することは不当であり、また経済にも大きな影響を及ぼすとし、「この法律の制定以前に存在し、(A)このような活動をおこなっている民間組織の活動を停止することを基本とする。しかし、(このような制度が)不可欠な地域の場合、または事情がある場合には、民間斡旋業者は…法律の施行後 3 年間は実行代理委員会が与える許可によってこの適用から外される。」<sup>170</sup>と例外を認めた。

この法律が実際に施行されたのは、1946 年 1 月 25 日であり、すでに法律が制定されてから 10 年以上が経過していた。政府は、新たに 4837 条<sup>171</sup>を制定し、3008 条について「政府は、職業斡旋の活動とこれに関する義務を実行するために職業安定所を設置する。」と職業安定所の設置を発表した。しかし、4837 条では、法律の対象が都市部の工業労働者のみとなっていた。1940 年代後半にはアカラ種の導入が成功し、政府は棉花栽培の拡大にとって、季節労働者が不可欠であると認識していた。アカラ種の栽培が拡大すると、政府は農業部門に関して、1951 年 8 月 8 日の 5835 条<sup>172</sup>「有料職業安定所に関する法の 96 番の国際労働協約(1949 年)を承認する法」の第 2 項において「…(国際労働)協約は営利目的の既存の斡旋業とともに、職業斡旋をおこなうことを承認する。」と定めた。つまり、この法律によって農業部門における民間斡旋業の存在は認められ、政府の規制から外すことが正式に決定されたのである。この結果、斡旋業者は行政の管理下から離れ、活動を継続することが認められた。

民間斡旋業の存続を事実上認めた背景には、政府は棉品種の普及にともなう季節労働者の必要性を認識していたためと思われる。円滑な労働供給には、斡旋制度の活用が不可欠であり、あえて規制から外したのである。この時期、摘み取り作業をおこなう季節労働者の供給地は、近郊の県から東部へと遠隔地に拡大し始めていた。政府は、広大な国土において栽培地と労働供給地の情報の伝達に支障が生じ、季節労働者の供給が滞り、繊維産業が原料不足に陥り、工業化の進展に悪影響を及ぼすことを懸念した。民間斡旋業の活用によって、季節労働者の供給は円滑におこなわれ、棉花の生産量は飛躍的に増加した。その結果、1950 年代には繊維産業は飛躍的に成長をとげ、エタティズム政策の目標であった繊維産業の輸入代替が実現したのである。

---

<sup>168</sup>Sayı 3308, İş Kanunu, 1936.Md.63/ I.

<sup>169</sup>Sayı 3308, İş Kanunu, 1936.Md.65/A.

<sup>170</sup>Sayı 3308, İş Kanunu, 1936.Md.65/B.

<sup>171</sup>Sayı 4837, İş ve işçi bulma kurumu kuruluşu ve görevleri hakkında kanun, 1946.

<sup>172</sup>Sayı 5835, Ücretli iş bulma büroları hakkında 96 sayılı sözleşme. 1951.

#### 4. 結び

オスマン帝国末期の19世紀後半、棉花は商品作物として注目され、アダナでも棉花栽培が開始された。共和国以前のトルコは、棉花をヨーロッパ諸国に向けて輸出し、綿製品を輸入する貿易構造であった。共和国政府は、繊維製品の国産化を目指して、原料となる棉花の品質の改善と安定的な供給への支援をおこなった。このなかで浮上したのがアダナ産棉花の品質問題であり、1930年代から米棉品種の導入の試みが政府主導で始まった。

本章では、第二次世界大戦後のトルコの繊維産業の発展を支えた輸入代替政策と米棉品種の移植に着目し、その成功の要因について明らかにした。その要因として 1. 政府による品種改良の支援と強制作付け、2. 価格の保証と域内の工場への安定的な供給、3. 季節労働者を供給する斡旋業の活用、が挙げられる。

米棉品種の導入には、政府の設計した計画経済の功績も大きい、むしろ地域社会に根ざした制度及びシステムを柔軟に活用したことが最大の成功要因といえる。政府の支援政策の手本となったのは、オスマン帝国末期における米棉品種の導入の失敗の経験であった。政府はこれまでの失敗の経験を包括的に検討し、これまで障害となっていたものを強制的に取り除き、不足していたものに対する支援をおこなった。具体的には、工業用の原料に適した棉花への改良に対する支援、品種の選択、情報発信という基礎部門への投資、及び強制力を伴う作付けの変更、価格政策、貿易規制などであった。新しい品種の作付けには高いリスクを伴うため、大規模栽培を行っているアダナでは特にそのリスクを懸念し、普及に多くの時間を要する可能性も存在した。そのため政府は、栽培者がリスク回避的な行動を選択しないよう、米棉品種の普及を迅速に進めるために価格を提示し買い取りを行ったのである。

1940年代後半には、アカラ種の改良に成功し急速に作付けが広まった。しかし米棉品種の普及に伴い予期せぬ問題が生じた。米棉品種は在来種と異なり、コットン・ボールが開裂する際に棉が外側に大きく広がるため、朔と棉を分けて摘みとらなければならなかった。しかも雨に濡れることで著しく品質が低下するため、収穫期間は雨季に入る直前までとなった。その結果、米棉品種の普及に伴い、大量の季節労働者が必要となった。本章ではこれを推計した結果、1948年には約28,000人から1950年には約60,000人と2倍以上に増加したことを確認した。

また、このような米棉品種の普及による労働需要の増加に対し、政府及び地域社会がどのように対応したのかに着目した。そのためオスマン帝国末期から共和国の初期までに、地域社会に形成された季節労働者とそれを供給した斡旋業の変容を取り上げた。

アダナでは、棉花栽培が導入された当初は、アメリカ南部をモデルとする定住型の農業労働者を使用した大規模栽培を想定していた。しかし労働者の定着が上手くいかなかったことから、季節労働者が選択された。このような季節労働者の給与の支給方法として、2つの方法があり、米棉品種の摘み取りに対しては現金払いが定着していた。季節労働者は、当初近隣の村から供給されていたが、アカラ種の普及によって、東部の山岳地帯へと広がりをみせた。労働者の供給先が遠くなるほど、斡旋業の役割が重要となった。山岳地域の農村など孤立した地域に広がるほど、棉花栽培地と労働者供給地の間の情報交換が困難となったのである。

政府は、このような民間斡旋業の役割の重要性を認識し、1936年の「職業安定法」で一時的に認めていた民間の斡旋業を規制から外し、1951年にはその活動を承認したのである。輸入代替政策を経済政策の目標に掲げる共和国政府は、地域社会のなかに形成された斡旋制度の役割を認め、円滑に労働者を供給する制度として民間の斡旋業を認めたのであった。

アダナにおける米棉品種の普及は、途上国の経済発展における開発計画と既存のシステムが融合した成功例といえる。輸入代替を優先した共和国政府の立場からすれば、斡旋業の選択は有用であった。だが、大量の季節労働の発生は、供給先となった東部山岳地域と西部の地域格差を表面化させ、1970年代には社会問題へと発展した。他方で、棉花生産の拡大によって、アダナ経済は急成長を遂げた。棉花栽培及び取引において成功を収めた民間資本家が繊維産業へと進出した。1951年にはパクタッシュ棉花取引株式会社、1952年にはギュネイ工場、1953年にはボッサ(BOSSA)、1954年には地中海繊維工場と国内最大級の工場が設立された。このような会社が母体となって、今日の企業グループが形成されるのである。